

つなみ 海嘯の記憶

神野麻郎

地面に散らばった小粒の珠玉が、夕日に輝いている。浩一は痺れを払い落とすように、腕を二度、三度と振り、それからポーズを作って指先にガラス玉を構え、気持ちを前に集中させようとする。誰も喋らなかつた。春の暮れ方の風か、大気が重たくよどんでいる。

勝負は浩一に有利に進んでいた。というばかりか、最近になく大勝ちしそうだった。清志と二人で始めて一時間ほど、清志ははじめ浩一が恐れたほど上手でなく、一回の勝負が終わるごとに浩一の缶には着実にガラス玉が増えていった。だから、浩一は喜んでよいはずだった。いや、ついさっきまで、浩一はたしかに嬉しくてしようがなかつたのだ。はじめのうちは笑顔も見せていた清志が、しだいに不機嫌と焦りにとらわれていくようなのを尻目に、浩一は次々に清志の持ち物だったきれいなガラス玉をわが物として、心が浮き立つのを抑えようがなかつた。真つ白の欠けたところのない五個玉、透明なガラス体の中に色つきの文様がオーロラのように妖しくはためいている十個玉、それらきれいな獲物が新しく、どんどん浩一のミルクの空き缶の中に落ちて誇らかに輝きはじめるのだ。さすがに、負け続ける清志に向かって露骨に勝ち誇るのははばかられた。だから、押し黙る清志に合わせて浩一も無口になった。とはいえ、しだいに硬く険しくなってくる清志の表情をうかがいはかり、そのうろたえぶりを眺めおろす愉しみも感じていた。

ところが、そんな余裕のある満ち足りた気分が一変してしまったのだ、長屋から清志の父親が出てきてからは。長屋のものかげからのつそりと現れたその父親は、二人のそばに来ると、黙って地面の上に散乱しているガラス玉を見下ろした。とたんに浩一は緊張した。その男の、どこか翳りのある無表情を恐れた。

清志の父親を、浩一は以前から見知っていた。清志を家に誘いにいった時や長屋の近くを通った時、何度か姿を見かけたことがある。痩せぎすで眼鏡をかけ髪は長めで、ちよつと学校の先生のような風采だったが、足が悪いらしく、一方の肩を落とし、片足をひきずるようにして歩いた。それに、いつも表情が陰気で近寄りたいたい感じがした。他の大人の男たちが仕事に出払っている時刻に、家やその周囲にいるのが不思議で、そのことはいつか清志に訊ねてみたことがある。そのとき清志はいまいにして答えなかつたが、ただ、父親は酒呑みなので嫌いだ、と思いのほか強い調子でいい切った。清志の家には母親がいまいようだった。二つ年上の姉がいて、食事の世話はだいたい姉がしてくれるそうだった。浩一はその姉も見かけたことがある。彼女も表情が乏しい感じだったが、浩一が気圧されてしまうほど、色白で整った顔立ちをしていた。

指先にガラス玉を構えながら、浩一は身体が妙にこわばってくるのを感じた。清志の父親

の方はつとめて見ないようにしながら、早く立ち去ってくれるように願っていた。しかし、しばらく突っ立ってゲームの進行を読んでいたらしい父親は、数歩歩いてかたわらの大石の上に腰を下ろした。そして、

「ビー玉はおもしろいのう」と、やや表情を崩してぼつんといひ、子供たちの勝負をじっと見まもる姿勢になった。

浩一は胸苦しさをおぼえた。清志の父親の視線が気になって、もはやさっきまでの、勝利に酔い、敗者を眺めおろす気持ちの余裕は保てなかった。それに、頭の中にふと、父親は清志の味方をするためにわざわざ長屋から出てきたのではないかという疑いがきざし、心が乱れた。その一方でまた、それならよけいに負けるわけにはいかないと意地になった。

すでに日は傾き、そばの立木の影が、浩一や清志の足もとまで長々と伸びてきている。長屋のあちこちで夕餉の仕度の音がする。小さな子が泣いている。母親の怒鳴る声。下手なハーモニカの音。犬の鳴き声。しかし浩一の耳にそれらの音は遠く、むしろ自分の鼓動が聞こえるような静寂に堪えられない気がした。身体の動きのぎこちなさが自分でもわかった。自分たちがいて、地面にガラス玉の散っているその空地の一角だけに、時は特別に重たく流れていくようだった。大小のガラス玉が、一様に夕日はらんで輝いている。それらは常よりも美しく、また貴重に思えた。

清志の父親の前でも、浩一は着々と清志のガラス玉をせしめていった。清志は父親が来ると表情を硬くしたが、緊張するとよけいにうまくいかず、簡単な失敗を続けておかした。途中から、父親が短い言葉を発して清志を叱咤するようになった。「なさけないのう」、「あかんなあ、おまえは」、「もつとよう見んか!」、「集中が足らんじゃ!」……などと、はじめはつぶやきのようなようだったのが、しだいに怒気を含んで鋭くなった。浩一の番の時には黙り、清志の番の時に限ってそうする。恐る恐る浩一が声の方をうかがうと、父親は石に坐ったままで身を乗りだし、異様な熱心さで地面のガラス玉を見つめていた。夕日を、眼鏡が鋭く照り返している。強い言葉を浴びせられるたび、清志はうなだれ、元気を失っていった。そうすると動作が鈍り、ますますうまくいかなかった。

そのうち浩一は、勝負に勝ち続けても少しも喜びを感じなくなっている自分に気づいた。喜びなどよりも、つぶてのように飛んできて清志を痛めつける父親の声の気配に、ある執拗なこだわりのようなものを感じとり、それを恐れた。そのこだわりの正体は何なのか、よくはわからない。だがそれは、鋭い声となって直接には清志を撃ちながら、清志を通して自分にも敵意を向けているように思われた。

浩一は息苦しくなった。そして今や、勝つと喜ぶどころか、清志の大事なガラス玉を無理に奪い取っているような後ろめたささえおぼえた。夕日に美しく輝くガラス玉は、清志と父親にとつてたんなるガラス玉以上のものなのかもしれない。そう、二人が誰にも知られずひそかに貯めていた宝物なのかもしれない。その宝物を、勝負づくであるとはいえ、いや勝負であることを利用して、自分は少しずつ掠め取っているのだ、浩一はそんなわけのわからない気持ちにもなった。

自分の番が来て手の玉を投げ、地面の玉に中てて弾く、その軽快な音が父親の耳には忌まわしく響くのだろう。そう思うと、浩一は指先に構えながら、もうこれは中らなければよいとさえ思うようになった。中らなければ、父親の胸にたぎっているらしいえたいの知れない暗い感情が少しはなだめられるだろう。だが手は、そういう気持ちとは無関係に、おぼえこんだ動きを機械的に反復していつもより正確なくらいに標的を捕えるのだった。

清志の番。しかしまた失敗して、横合いからひどい言葉が投げつけられる。とうとう清志の目から涙がこぼれ落ちた。涙は地面に小さな染みをつくった。それに気づくと、浩一はまったく弱気になった。ちようど日も暮れかかり、夕飯の時刻も近い。で、一回の勝負にけりがついた時、これではひどい勝ち逃げになるなとためらいもしながら、

「清志、もうやめよ！」と思いきっていつてみた。その瞬間、涙を浮かべた清志の顔が奇妙に歪んだ。焦りや怯え、そして落胆が入りまじったような、複雑な表情だった。浩一はとっさに、

「これ、半分やるわ！」と、始める前の倍ほどにかさを増した空き缶の中に手を突っこみ、乱暴にガラス玉の固まりを掴みだそうとした。が、その時かたわらから鋭い声が飛んできて、浩一を激しく撃った。

「勝負じゃからしようない！清志、ほんなんもらうなよ！乞食とちゃうんじゃけん」

声の方をちらつと見て、浩一は恐れた。そして泣きだしたくなった。何もいえず、清志に背を向けて歩きだし、途中から走った。両手でかかえた缶の中でガラス玉のじやらじやら鳴る音も、その手ごたえのある重みも、むしろ今ほうとましかった。何か罪深いことをして詰られ、逃げ走っているような、情けない気持ちになった。清志は後で父親にひどくぶたれるのだろうか。なぜ清志の父親は子供の遊びにあんなに意地になるのか。

屋根を付けた小箱をいくつも並べ置いたような市営住宅地の底に、薄闇がたまりかけていた。

新学期が始まったばかりのころで、浩一は去年に続いて清志と同じクラスだったが、休み時間もあまりいっしょに遊ばなかった。というより、清志はクラスの誰ともうちとけて遊ぶことはないようで、いつも一人で自分の席に坐っているようなおとなしい子供だった。しかし、たまに喧嘩をした。すると、身体も大きい方ではないのに強かった。それも、床に倒れてすでに戦意を失っている相手をさらに殴りつけ、足蹴にするといったぐあいで、容赦のないところがあった。それでクラスの男子からは一目置かれたが、またそれは孤立を深める結果にもなった。

家が近かったので、下校時にはいっしょになることがよくあった。一年ほど前、父親の仕事の都合で同じ市内の小島から家族で移ってきたばかりの浩一には、近所にそれほど多くの遊び友だちがいるわけではなかった。清志は口数も少なく、自分からおもしろい遊びをしかけてくる方でもなかったが、浩一は清志といっしょにいるのが嫌ではなかった。むしろ、清志の一人でも淋しがらないところや腕力にある種の畏敬を感じ、自分にはないものとし

て惹かれていた。また付き合うにつれ、清志の無表情の裏側にひどくやわらかい心の部分のあることを見出して、それが自分の中のやわらかい部分と同じであるように感じていた。気持ちいが内側に沈みこむような時にすぐに触れられる心のそのやわらかい部分とは、うまくいえないが何か淋しさのようなものだ。たぶん幼い頃からあって、ずっとあって、死ぬまで続くのかもしれない、淋しさのようなものだ。

しかし、ビー玉のことがあってからはしばらく、浩一は清志の家に近づこうとしなかった。むろん清志の父に会おうのを恐れたからだが、すると自然と清志と遊ぶ機会も少なくなった。

そうするうち、ある日からふつとり、教室に清志の姿が見えなくなった。二日、三日ほどは清志の席の空白を浩一は気にもとめなかったが、四日たち五日たつと、しだいにその席の不自然な空虚が目立ってきた。それで浩一は、まだよく馴染めないでいた担任の教師におずおずと訊ねてみたのだが、その初老の女教師は鈍い表情で、「いろいろわけがあつてねえ」とはぐらかした。

事情が知れたのは、窓際の席の不自然な空虚が十日ほども続いた後の、ホームルームの間だった。担任はいつものように笑顔を作りながら、清志は家の都合で急に転校せざるをえなくなったこと、清志が、別れもいえなくて残念だったけど、皆によろしくといっていたということ、友だちが一人去って淋しいけれど、これからも皆で力を合わせてがんばっているということをやどみなく喋った。ホームルームの後、浩一は教卓のところに行き、清志の転校先を訊ねてみたが、女教師はまた鈍い表情になって、ただ県庁のある街の名前を挙げるばかりだった。

その日、浩一は帰宅して持ち物を家の中に投げ込むと、すぐ長屋の方に走った。横に二棟が並ぶ棟割長屋の、端から何番目かの清志たちが住んでいた家は、玄関先に立つとガラス戸が開いたままで、闇を通して裏庭まで筒抜けだった。でも闇に目を馴らしてみても、小暗い部屋の中には天井から垂れ下がった電球のないソケットと、ところどころ擦り切れてささくれ立った古畳以外、何もなかった。浩一はそこにも教室の席と同じ、不自然な空虚を見出したばかりだった。が、その空虚を見つづけているうちに、かえって、こんなに狭くて小暗い空間に、つい最近まで清志とその父親と姉との三人が暮っていたということの方が信じがたい気もしてきた。清志たち一家は、にぎやかな街のもっと明るくて広い家に引っ越したのかとも想像した。足もとの、反りかえって粗い壁土をのぞかせている壁板のそばに、ほこりにまみれた空の酒瓶が数本、乱雑に倒れていた。

長屋のすぐ裏が、土が盛り上げられて中学校のグラウンドになっている。浩一がぼんやりした頭でそこに出ていくと、近くで白いユニフォームを着た中学生たちが野球の練習をしていた。浩一の目には大人らしく映る中学生たちは、かすれた太い声をかけあい、自分の身体をいじめるのが楽しいようにむしゅらに白球を追っている。その軽快な動きもグラウンドに満ちる光も、今の浩一にはすべてが明るすぎて別世界のような気がした。左手の山の上から白雲が現れて、鉄筋の校舎の上の方へと早く流れてゆく。それを眺めているうちに、

浩一は清志の不在のむなしさにあらためて打たれた。あのきれいな顔立ちの、やはり表情の乏しかった清志の姉ももういない。あの父親も。白雲は埋立て地を越えて、海の方へと流れてゆく。東方の海の、その果てには何があるのか。

清志の一家が立ち去ったほんとうの事情は、ほどなく夜の食卓での父母の会話から知れた。清志の父親がどこかの家に盗みに入り、警察に捕まったというのだ。そして、役所勤めで清志の家の内情にも多少通じているらしい父は、清志もその姉も引き取り手がないので、県庁のある街のとある施設に入れられた、と話した。

「おとなしそうなオヤっさんだったけどな。酒呑みでなあ。それが原因で夫婦別れもしたらしい」と湯呑みを握りながら父がいう。

「なんや、足の悪い人だったな」と母が、昼間の真珠の養殖筏での日雇いに疲れた顔で応ずる。

「戦争でな……。ほれでヤケになったところがあつたんだろ。もともとは多少は学もある、えらい人だったらしいが」

「ほなけど、ほんなんしてしても。第一、子供らがかわいそうなでえ」

「おお、ほりやほうじや。あれもこれものう、結局、戦争と貧乏のためじゃ」と父は溜息をつく。

聞きながら浩一は、清志の一家の不幸を漠然と思った。そして、あの夕日の中で清志を激しく叱咤した父親の姿を思い出した。あの時父親は、子供の遊びにすぎないのに異様に執着し、えたいの知れない暗い感情を清志にか、浩一にか、それとも別の何ものかへかぶつけようとしていた。思いがけず大人の激情にふれて浩一はたじろぎ、恐れたのだった。その時の頭の痺れたような感覚は今でも頭の隅にしこりのようになって残っているが、しかし今父母の話を聞いたせいでも、清志の父親をいぶかる気持ちはやや薄らいだ。そしてあの時の父親の行為が少しは腑に落ちるような気もした。もしかすると父親はあの時、直接には息子を叱咤しながら、他の何ものかに対して強く怒っていたのではないか。そしてそうすることで他の攻撃から何かを守ろうとしていたのではないか。その何かとは、父親と清志にとって大事なものだったのだろう。固まり、涙をこぼしたあの時の清志も、親子だから、父親のふるまいの意味がわかっていたのではないか。ああして叱り叱られながら、二人は密に通い合っていたのではないか。

浩一には、あの眼鏡をかけた先生のような風采の父親が、どこかの家に盗みに入る光景は想像しにくかった。よしそれが実際にあつたことだとしても、それならその時も父親はしかたなくあの暗い感情にとらわれていたのではなかったか。何か自分たちにとって大事なものを守るために怒り、そして行き過ぎてしまったのではないか。

おそらく無表情でこらえながら、幾人もの見知らぬ大人たちの手を経て街の施設に連れて行かれたのだろう清志は、今何をし、何を考えているのだろうか。その想像も届かなかったが、無表情がますます固まっていく清志の顔ばかりが浮かんた。

浩一の家族が住む市営住宅地は、ほんの二、三年前に新しく造成された所で、方形に広がる敷地に箱型の家が十二軒ばかりも立ち並び、一軒は中壁に仕切られて二家族が隣り合わせに住んでいた。もとは池だったらしく、近くの山を崩した山土を大量に入れて底上げしていたが、それでも地面は周囲の昔からある家々の位置よりだいぶ低かった。おまけに排水設備が不完全なようで、そのため大雨のたびに浸水の恐れがあった。実際、少しの長雨で排水溝の水は溢れたし、その水が地面をどろどろにして家の土間のセメントの上を這いだすのにも、そう時間はかからなかった。雨降りが続く、玄関の戸の下の隙間から水の舌がひたひたと延びてきてセメントを黒く侵しはじめると、子供たちはおもしろがるが、母親は不機嫌になる。そろそろ、家具や畳を机や木箱の上に積み上げたり、上の押入れにしまったりする心配をしなければならなかった。

一年ほど前に島から移ってきて以来、一家はそうしてもう何度も床下の浸水を経験していた。床下で収まればまだ被害は少ないが、ただ便所の浄化槽があふれて困る。雨が止んだ後で長靴をはいて外に出てみると、一面池のようになった泥水の上に、汚物が浮き蛆虫が泳いでいるのは、あまり気持ちのよい眺めではなかった。

去年の秋、台風の影響の長雨が続いた時には、とうとう床下の浸水では収まらなかった。玄関の戸の下から勢いよく延びてきた水の舌は、たちまち土間のセメント全面を浸したばかりでなく、みるみる高を増した。母親は慌てて流しの下の食器や道具類をかたづけ、学校が早退けになった子供たちにも手伝わして部屋の家具や畳を積み上げにかかった。昼過ぎ、父親が早めに役所から戻ってきた頃には、出水はもう数センチで床上に届こうとしていた。父は二言三言母に指示すると、すぐ隣の一人暮らしの老婆のところへ手伝いに行った。そしてやがて泥水の中を老婆を背負って戻ってきて、皆に合羽を着て中学校へ避難するように告げた。皆は荷物を分け持つて外に出たが、雨は小暗い空からなおも激しく降りそそいだ。あたり一面が山土色の泥海で、道も排水溝も見分けがつかなかった。浩一は、弟を背負って歩く母の後ろを、雨傘をさし、ランドセルを負い、飼犬のエスをかかえるという恰好で懸命についていった。長靴はすぐ水に没して歩きにくかったし、雨傘もまるで役に立たず、濡れて身体が震えた。

中学校の体育館にたどりつくくと、すでに明るい蛍光灯の下に市営住宅や長屋の人々が大勢集まっていた。浩一たちの後からも避難してくる人が次々にあった。夕方には炊出しの握り飯が皆に配られた。その折の、莫塵を敷き家族ごとにかたまったわびしいまどいの中で、集団の端の方に小さく身を寄せ合っていた清志の家族の情景を浩一はよく憶えている。青年の男たちが警防や連絡でたいい外に出ている中では、清志の父親の姿はやはり目立っていた。父親は、周囲とあまり交わらず、女たちのひそひそ話や気丈な笑い声を避けるように頭を落としていた。その父に清志が向き合い、清志の姉が向き合い、何を話すというのになく三人はただ互いに向き合っているように見えた。それは淋しげだが、鳥が羽を交わすように、やさしい感情も流れている情景だった。

その時は一晩体育館で過ごしただけで、翌朝には水が退きはじめ、皆は三々五々自宅に戻りはじめた。ゆるい流れのある黄色い水をかきわけながら、雨後の頭上に広がった秋空の深さをうそのように思っていた。浩一たちが家に着いてみると、すでに水は床下に退いていたが、部屋の床板は泥や汚物やゴミで汚れ放題で、呆然とするほかなかった。それでも母親は、怒ったような顔をして無言でてきばきと掃除にかかり、床板の上に石灰を撒き、その夜はどうやら何枚かの畳を敷いて家族いっしょに蒲団にくるまることができたのだった。けれども、家具がもとの位置に戻り、地面がすっかり乾く頃になっても、床上三〇センチほどの高さの壁や柱や雨戸に、家のぐるりを切り取るようにしるされた赤茶けた直線は、魔物の残していった刻印のように消えることがなかった。

清志の一家が去って一カ月ほどたったある日の明け方、浩一は母親に激しく揺り起こされた。

「浩ちゃん、はよ起き！海嘯つなみじゃ、海嘯が来るっていよるよう！はよう、着替えて、逃げんとあかん！」

いつになくうるたえている母を寝ぼけまなこにとらえながら、浩一はとっさに事情が呑みこめなかった。そばで弟がやはり揺り起こされて、べそをかいている。外から父の怒鳴り声が出た。

「来よるわ！海の底の泥巻き上げて、来よるわ！皆、はよう山へ逃げるんじゃ！」

開け放った戸口から、父がああ去年の秋の出水の時のように隣の老婆を背負っているのが見える。しかし、老婆はあの時とは違って寝巻のまま、父の顔も形相が変わっていた。

「着替えてええ！ほのまま、ほの上にこれ羽織って……」と母は大声でいい、枕もとにたんだ上着をつかんで乱暴に浩一に押しつける。

「いやもう、ほれ持って、はよう山へ、山へ逃げるんじゃ！海嘯が来るって！」

ようやく事態が呑みこめてきた浩一は、外に飛びだし、「エス、エス！」と叫びながら玄関のそばの犬小屋へ行った。だが鎖で繋いでいたはずのエスの姿はない。浩一は焦って、なおも犬の名を呼びながら家の周りを駆けまわった。まだいくらか夜闇を含んでいる外気の中に、あちこちの家から人が飛びだしてくる。寝巻のまま、「大変じゃ、大変じゃ！」と甲高い声で狂ったように叫びながら走る人がある。子供たちも、荷物をかかえた大人たちも皆、住宅地を突っ切って山の方へと急いでいた。浩一もその人の流れの方へ、一目散に走った。そして長屋の横手から山道にかかろうとした時、足もとにじゃれついてくるエスには気づいたが、母親や弟の姿は見失っていた。不安に襲われて立ち止まり、後ろを振り向いたその時、浩一の目にまだ夢の中をさまよっているのかと疑うような光景が映った。長屋の二つの棟の間に、黒々としたものがどつと湧きだしたかと思う間もなくたちまち盛り上がり、しぶきを打ち上げながら一気に押し寄せてくるのだ。浩一は走った。背後で地も家も人も悲鳴をあげているような気がした。そして目の前の風景が奇妙に歪んだ。それからのことはしばらく記憶にない――。

気がつくとも山道の中途の平らな場所にいた。近所の人が大勢集まっている。その中から、「浩ちゃん、浩ちゃん！」と母の呼び声がして、浩一はやっと我に返り、とたんに涙があふれた。弟は母に手をつながれていた。どこに行っていたのか、人々の間からエスも飛びついてきて、さかんに顔をなめられた。

そこはあたりに山桜の木が多く、ついこの間まで近所の人たちが花見を楽しんでいた所だ。しかし今、人々は桜若葉の枝の間から、なすすべもなく下方を眺めている。集まっているのは女子供か老人が多かった。市営住宅の人もある。長屋の人もある。老婆も赤ん坊も。日頃見馴れた、駄菓子屋のおばさんもある。去年の台風の時、新築の二階に一家で避難させてもらった、養豚業をしている朝鮮人のおばさんもある。皆着のままで飛びだしてきた恰好で、荷物らしい荷物もなかった。だが人々は、沈んで黙りこんでいるのではなかった。不思議に昂ぶった気分が漂い、下界を眺めおろしながらむしる饒舌になっていた。甲高く笑うおばさんもあり、泣きわめいている老婆もあったが……。

気持ちの落ち着いてきた浩一が、梢の間から見おろすと、見馴れた町はずでに水浸しだった。町と海との境目がなくなり、湾が膨張していた。海の中に家並みが浮き上がり、道路も川も埋立て地も見分けがつかなかった。そして町全体を覆った水は、まだおもむろに動いているようだった。それはその表面を漂う板ぎれや家具やの物の動きでわかった。海底の泥を巻き上げてきた黒い水は、地の盆をたやすく溢れさせると、さらに新しい獲物を求めるように不規則に流れていた。

息を切らせながら坂道を駆け上がった男が、皆に下界のようすを知らせた。「家のそばにな、鯛が腹見せて浮いとんぞう！」という男の言葉に、笑い声が上がった。男は、この大海嘯の原因が、昨日地球の裏側の南米で起きた大地震であるらしいこと、第二波、第三波があるかもしれないから皆はまだここにいるほうがよいことを告げ、坂道を駆け戻っていた。

浩一が場所を変えてのぞくと、自分たちの市営住宅群の建物自体は、やはり黒い水に浸かっただけが無事であることがわかった。水が退いてからの後始末がまた大変だろうと思っただけで、中学校のグラウンドも水浸しだが、鉄筋の校舎はさすがに動じず立っている。ところが、市営住宅と中学校の間が、不自然に空虚なだった。二棟並んでいた長屋が、そっくりかき消えていた。そのあたりには黒い水の表面が光っているばかりで、跡形もなかった。

浩一はとっさに清志の顔を思い浮かべ、そして清志の一家がそこにいなくてよかったと思った。しかしすぐ後から、これで清志の一家の姿が、すっかり目の前から消えてしまったとも思った。清志が、ほんとうに遠くに去ったと思った。

「ああ、筏が流されていく！」と、近くのおばさんが叫んだ。皆がいつせいにその方を眺めた。湾の中ほどを、真珠の養殖の筏が外海の方へと、横並びになってさあっと流されてゆく。すさまじい速度だった。漁船にも、人は乗っているのかいないのか、同じように流されていくものがある。海全体が一つの方向に流れている。そして湾内のようすがみるみる変わった。ところどころで、海の底が不気味に姿を露わしたのだ。

「あれ、見てみい！また波……」

遠く湾口に、泡立つ波の壁が一直線に連なっている。磁力に引かれるようにそちらの方へと流れていく真珠の筏も船も、まもなくそれに呑みこまれるのは確実に思われた。曇天の雲の合間に、わずかに朝の黄色い光が躍っている。